曽我物語第十二

曽我物語巻之第十二

慶應義塾圖書館之印

一 義経(き)かくて敗北(はいほく)の事

一 禅師(ぜんし)ぬしか自害(じがい)の事

一 京(きやう)の小次郎か死(し)ぬる事

一 三浦(みうら)のすけか出家(しゆつけ)の事

賞栈物語巻第十二

さても母は子共(こども)の知る所は小袖(こそで)とおもひくれなりおもひて
弟子其儘(そのまゝ)隔たる道より消入(きえいり)ける女房(にようばう)も漸(やうやう)妙々(めいめい)し
菜(な)もとにまかせて妻(め)も遊びにまかり(?)にけるも道は終(をはり)めくらんと(?)めを
多く書の(あそ)をよ文ひきつくしと十四(?)に目(め)を
かれしたる袖かすまりてやさしくいと見て(?)月(?)
ひきわて又よりかゝりて息の苦(?)しき(とき)は
母とし人(よ)文の方なるまま半(?)つし小袖(こそで)と(?)

むかし世すてのおとこ人とかくして時折かしこそありけるに二人
はまそ米の二ハいりる物紙をすくして窓とよひけるや
しさん御前の手をつかりとよひてやこのかたにはたらく
とよひるや式程なるきめゆへよ度して此ひとち
いさりけるまさきむ銭をかはらくゆるさはる世に一めて
人まうまゝしくさくそんさらしよ帰りくて抱りく
も学して妙と貴人さうふて折をそ金銀折しさて似う
都りつる両親とよろ代の世よるあらきんとゝえて折しまゝ

あ紀居しくいふある賤男賤女よりなりて悟とかゝる
いふりまり二言の世居と名のりて暮し紀念をなる
保まり諦める事いさまり経のみ世見にのありは人や母は十部
居しりけるゆゑよたとへ念仏ますまゝしめしとそへうる
ぢ此ゆめぬるてはあ書ある字のきもいとかくれは一切
有為法　如夢幻泡影　如露亦如電　応作如是観と然
書かりけるをみしとありぬ物もあきちろすまくは人なり
後ともまくすりしこのおりにいは古しこ万葉と名のて

さくし、其趣とりよりくきまて今す此料紙ハ清らかに
しかるのミくさもよハ誰か此是紙よりくさとよるとかうして
物よりもなかと云二面文の書ことなくしらさ給ふ物よりなる
ゆきつきて是中ハ云もしまわけすへの事し神や佛よ
しりてハ此ちとおもく猶さらとこの事ハ其外ハなく
明暮歌よまんとのきかまれハ二のうへ道よりすかの
ものもなかまでしきなや要りても難書と如く此家
してなんさ思ふことの御さまをせらハ筆のかきて

なしとせん事ととハ露ぞてたゝ色ハ清師よ云人の
世の年代時まかよ木考とうらしと読みてなくして何と
なく月日と定しとてもなる小袖書出こそしるれ
見ゆるらくさ思しと二面文の書展のこすら急にみえこそ也
と云とせしハらぬと詠む其もかしもしめん中く
に歌の役なりさらハ身ありて見てハおしへず
らうと情ら色し角てし補写何よつかへなぬ
まさなりと何ままぬ毎しるらと云字色てこの

まかり義のきこえかくすかしをもそくもかゝる
しきたまへは、家子うしとられすゝき毎にさゝれし
おほしつけ梅花作中の思ひとするわりかゝ流のするさ
ありしに露ひかりされて一西とも類のする事となす
甚しかりしきの人その手たきふるさをしけれ人にこそ
まさりの中本章よかのとのまへ事とあれともしり
まさにをそうしと文こそしひをきかしとそ歌よる
毋日の書段のあくらかよそそこひてすまくもなりて

まかりけれ情てき扇して公方たまはる情条にゆくまつ
らしやとおもふ故にくそ流き命と情のまとしに浄
たれく生けめいしに恋ふ人こそ湯のとへ遠かれ
流るる事に露のいみちとあやうのそえてしまてき
人しあはれてうき世のすらいる男一の歌きしけると
なし与鎧皆すかしし平家の公達は一谷よ十人まさ人
め代あにそ海中よまつてこらあよらつさその数を
うきわれしし日数経より年月をへて里のまいさ

うとしをすたれしからとの世しあらハ父母よとられあらハ
文書よまされ文親子兄弟よとらせて駿りのなきあきてれ
れくらん名息よハおちとまつおほいすし浅の字代なる女よ
乞男と格をおん手さらでまたるほどのあるきハおころ
ごかおりし女子なく聞し猿大とあらそて子ふかるとあを
せてくまして子代あらよ思しく前と生弱んしよ
飛業のかとと初を女子ハいふて男と全して色れ
いとらい白てを多くよりも事に綿濁のえるとや

君姫しいろのさてハつくきなり釈ん僧達ときこへ奉る上等
西覚姫野谷者様とそ為御かる母ハ称も帝ハつくさるの
けつさぬ玉ると云ふ小歌きられしきとる定家や世帯の
定まるきおこくの揺とそ姫さけの猶称の別当よこれ
まてとやハそさ営我もくそうりのひりし歌きぬ仝とこ
よふ出しけのおりね画僧らおこくの神よそまの師関
宮子のかりらくつきしらハけすらて浅くと語そふよ法
持俤薄しけの花葉花ととふくしいきしつの七日く以下

年九日まで、もこたびの逆善あり、ゆゑによそこの権現
十悪五逆の大罪ても一念十念の功をもつて来迎
往生をとぐる、他力の本願なり、しかるに
それ五逆とは父の命を害し、母をころし、そのうへ
罪なくして罪をかうぶり、そのうへ
さまざまの悪をなして随罪せらるゝと、犯しをおかす
又此国の身に実をうけて、十八界に生るゝも、法師あり
仏法の中にて、生れ出る悪の苦よ

もとは人とせしと、修行者の身として越後の国
九人といふ山寺の住僧は、いかなる九郎
手越にいりてみちをとをり、源家の義宣か子と
号して打かけ、武蔵の国より奉りきこしめ
義宣より相伝されたる家の子
郎等数十人そのうち一夜の内に穿之大
事といひなから、乱の中に代々の譲をたへぬ為
武蔵の国のものなりしなれば、そのまゝむさしの国にありける也

ふるき道のことをわすれて世人のまよひて務めのほかにこころを
見ることの世に出でたる者をもすくはることの故にぞせめし
もし宣の役は坊主にて念仏宗といふ禅師にて
いふや子ども兄弟の子の家をすてて他の親に仕へ常に
あやまりきたることや念仏の罪科はうけのがれしとぞ言はれし
りうとやかなしき事ある命終なる人にてまもりて往生せ
いふ人のめくりもうけてうまれける所の後悔すれども
叶ふぞ佛のまことの道をもとめける人をすくはんとすれども

さる程に中納言の舎弟とさうしをわたりしを当時
第一の大舎一家の禄はなはだしく識者の功力より
剃りの手執をもとめし　兼ねて世事に違はれたるを
こまいして行きとめゆきてのち家を出でぞ入り
ましまさんとする事を同じくならぬは心のまま
つきたる人のまたしの事にまかせてや人の道をとりて
いはれたる自害して名をすてしは一に日の達の世をめぐらせ
こころもなくらしく言ひけるも寺中坊中

のミならず我し放逸と怠りなれバ大事に成て我身をうしなふ
よくしりてそのくらゐ人をハわきまへ随ひ勤させて
もろく自害と申ものを者ハ孝子の無念とみてもなし
りそふ所の役ハ廃して実(?)て一通に書ふれハちかふとなし
上気をうしなひけれハ後させしよふの慚る事ハ浮気
ゆへひとつけれハうしなふのそてなく(?)あそのおかし気き
うしなをきて必ずあやまれのなきとしてそのせられ
らくしもなく主借ハ心得のうへにて方と思ひけれ

弟子ハ弟子と云わけハ昔の事を思ひ出して此
手足を持ながら何ことも心指なれバ其前なることを持
おもきんで行儀の為にハ孫をもすてて先々の教を他
なる所ハ云てわけの有ハおのれか仕事の身迄も
一服一生の宛行ハ勤の事に付ても覚と云ても人
又其母孝行にして此心をも商売の家をもつて雅
算用とてもてあけかる事の眼にもと見るに我れうく意
預りとても申ものを主と家人奉公するにも甚忍乃

自害不成の所なり楚忽といひつべけれとて叙使
とおほくめしとれとの従者と聞て主人の仕へあまたの言
義なれはとて御教てうかかひて二人と共に藤を折てもとけ
工藤は二人にてられ宮と太刀窮なりて上生の方へ
仕りといひける会をうけて背とわかせて和わすそて
かよひける聞けさまで新郷はいつとて宿泉いわり
けるを義ねうるにたやとかを落経の詩をそ役せ
からとして元紀の詩さにて夜にいたりうつるの世

まいれとう他あゆに并そしまくはそにたるを頃ほ
まかりたりはいか主あふ月にみえてたりとて深津海
家のまきみ山へきと戸に身のまれは志うつく相も作
られを賢也そのいよし己とえんとや思はえ人を施にかく
いきて入ゆるし肉を移てたふく会と両ねかきては
きも面しとおちもてきれ惣まは禅師けれはうくるをと
打もちふくし人とも思はすていさりもえるの即ち
たもへ身分れをかへは年老まてめきものきさしをもや

目ま人為のまさしきなり今よりはそこそたる狂の此言葉ハよ
色定れし情き伝りけいそやりける衣仲台法師に見え
いかさま言り助かるべき縁し文章とかこすなき
なやらくそ目あつる重なる師とそ思ひ出ける禅師
かくてそやけれハそこも助かるこそしき刃刹那のかくへ
うらそしくね前てなとなきよふと云ふりよとれハ生
年十八歳にて終にこそきなる無縁なる最期
哀けなるの言葉に気色とほくと思へてこそなり

なる者ハいかしまゝの義理来よ高声なる思ひと与へはて
あるまの思ひ思ひまするなりまかしも矢とる者ハ
誰か為さるハおつ孫とも祖の菊士三にはなく
なるまやしと傍にしあつまゝ心安くと云ふ者
頼ハ御前移従のさるハし種とあらさみかり
守り又此人をよるさられ同気であって一般の見来
の出くろしかくくハ月よりゆくて頃の出ひ人摂津守
の侍より出さのそのより謀叛たてしてあれるとゆくめんこそく

中井の濱にて大平の府とかよふ所に營義と云ものあり經
高殿と云ありかねて去る五月に才いとし所にて其
たゞいつとしも身をとそよしあしは今も此世にしらせ
是しかば武頼として播磨とかよひしかば家は佗人にて不
孝の名をおそれてあまつさへ遠き人の年九月上旬よ
り妬みしは日をふる月日を費てうかうかと暮しは寂
なく秋の末暮行ば此人を思ひ出しおもく妬み母は
藤根よのおりのその如くの悲ならはいとあまりにとも思ひける心の
經れあまた扶養せし大家のこゝろ浅からさりしかは母
十郎ことに逆に又やせて賢からで思の外よわく身を
み營とそれは職を先は又から初義は若き君にて
きすゝめりしせしるいも營義入来り母の家に
おくなる侍にてよきるは咎は此人その百ヶ日にそ人形の
ことくの弔は大殊て營ときまて此藤根にて所作
のうし前て思ひし身も思ひ指よ營へいりし後とつて逆
きまて田中りて其親を思ひはつゝりとて十郎か

すへし心婦人の言の好み八重にて[illegible]すへて[illegible]
さのみ[illegible]なすへき嫉妬の事なれハ曹く世話へ戸て意
外の柳の[illegible]といひき婦人男なりハすり何て
恋文などの全ハ浮わ匿のかしらの何と踏わる
全て[illegible]の[illegible]かつて[illegible]の
孫と[illegible]いて[illegible]の名[illegible]まて
なる人を[illegible]の書[illegible]のかた草ま
[illegible]代[illegible]の[illegible]い

全[illegible]小そ贈ハ[illegible]て居[illegible]内[illegible]
神[illegible]の[illegible]物ハ[illegible]の[illegible]とけ[illegible]
[illegible]け[illegible]激[illegible]ます[illegible]
切出[illegible]と一同[illegible]何と[illegible]て[illegible]
と[illegible]とめて[illegible]と[illegible]母[illegible]
外て[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]子[illegible]
[illegible]けると[illegible]て[illegible]

ましての母はみることもなくひとつは角あるべきに
おもひける人十郎が時のいかにかかるへきに
色かはるとも此世をしらぬものよらぬさしむきに
うらくわかこふてきふしのよろこひのおもひに
ゆきふるそてすみれ申此後十郎が形見
思ひいでしよりけくうてきりなむとおもひてそれ
うしく思ひ出めくとさくいうまてあるしみ道の枝
かゝるよしみて道つゆしけきすそみ涙みえ

とかくしけり形見とてのこしとゝめておきしかたみ
ことふみも書てはこをもちまことにこそあるよきこゝろ
なりさふらへ先の人の為なりし形見をすこしのたね
御経書代にて思ひ出てはとひとてもおもひ
書写かおもひのことく形見はよろしきにそめてくこと
からくしものをさかる小袖みちていとふかのへき
みや見し此世の布施にして思ひ出て十郎は十郎の事
かりそめ袈裟をかけてもはいまはさい葉かゝきさみけり

涅槃とかやとかまへ今ハの時一日片時の命も惜からう
父母兄弟のなかよりも百日のうちよりもまさりこの子まことかまいらせ
ゐおりしとも思ひてこそかいりまいらせ二人ハ兄と弟かさねた
右の並ゆふすまにて父の形見と思ひ出で時に付て枝葉
よりてハ戀しかりしにより心ちハ誰と申人何とかなくなさぬ
武藏ハ法師よりかへりさまにしとかくまよひし不孝と思ひ
しるしを偏にもせよといふ人もありしが身の貧なるまゝ何と
なく折々月日をおくりしに此たひ人からかくる上ぼへよく

思ふくさむらふそこにて打出時見つかまへて来りて涙と
おちいてやかてかくれもせよとおもひきうとかくこの葉
とうちて古はいかもめつゝましうしめしも入させて親子
らまハ哀なる事のあるのすゑにつれなくかさねて心つき
と未りくし思ひてはりくまいりしよ歎かれめとく
大宿間のかしていまうらしとゆかてうまきさの深く
の文と思ひそへ又の柳大なる飲さえてかねの香るこそ
まかしいかなと風まの身もたゆしさが慕ふてそれまで

うつりゆく思ひの色是何にか年月不孝なる人と道
しかくまても命こそは責てゝかうは世をそてゝ命まとはる
乃至儒といふものまなし思ふ人は此の世をしらめいかんそ夢
とこそまことそ流へりごとし深よもをも流へるうしは
世をもいくさ皇きり乎まの此代かちさもなそと思尾をまとつり
是に人の経いふ事ての家級によしおもらし身のうちみの
うしまでも古事つきるくし人いしよみよまよ人とすまいは字くかんてを
進学の人に経へ中文人乃てきしをもて十ちゝ文を中丈

まからしそてよまきんとすまいは目を命まてゝは此代を二此
見てくまらんとて年月にあて思ふにあて流てる流れとなる
抑それの物語あへきとれ有ものいさしては屋をしくある
今ゆるまゝけんとおもいこそ内さ皇のゝこと心は是にも思ひ
亭くいまつよ妙阿にありさゝ巻程への見すきをて命て
あつさよりぶ命しきあらはあるやうまてつ教書をそく
いそ言りは所作と称て世にほ議訂ましをもらてきぬふ
あまたいきぬ人にすまてまゝ命ある七たび思ひに評の法い

ふしきなるかなともあまりの御縁からんあはれなりしは
しかるに泣く泣く是をもつて建春門院の御時和泉式部
が娘小式部の内侍と申して世に聞えし
思ひて母の歌を慰めんとて思食す事のありけるが
あるとき[illegible]にはいたく
りける女に昔の事を語りて恨みぬ君を[illegible]
この様はいかにと思ひまして思はれてかくしもなく
われいかにやとて[illegible]の事のとしは[illegible]

さて此人はいかなる者ぞといふに傅大納言道綱
と導師に定まりて[illegible]の手をうけし[illegible]
一人の御子の命をめでまして[illegible]
御室の[illegible]母からし給ひて[illegible]
い思ひまして[illegible]
いかにして[illegible]の[illegible]月[illegible]
局の前を[illegible]
左の方[illegible]と思ひ[illegible]

みづからもすゝめしかれかなしむ秋のあはれふ覚えて
かゝる世なれや浄名居士の手にたまる露とこそしらめ
しらるゝくさわらしい島の付ふれて松風はそふる人
よかしいまそまさや世よきまつらん人はとつきあまことを作る
やまにてし風のいきおい強き宮ふ吹きぬる葉われの
宿とは松かゝりのおとかなしむもつらの思ひ嘆きは
いまも打ちふるぬれしくいたきもて寺せて物を祈りし
ねこの所に暫留りてさいのくるしき使いかにことも屈

聞とならふは猫の宮とやこゝろらん世も憂くもこそ岩と
いゑは打捨ぬおのがちゝをする今の代の中がら経くぞ有
行をいうことも見るあすか川もあらぬぞ今は流るゝやれるらん湯
坂滝とのあのふにまつ里て人こそ道と角ぞかなしみし
しとおもふ屋らあつさに矢さその松と八人あきなく
その人のいる矢しこの木の枝にゆるなるらんと二十念の風に
あつくも山ぢくるゆく所に紅葉根の寺にむさきる
やうそ判官が合戦してさても峠の日数のあはれは

事とは仰せられたれば、今日仏事に奉加させたまへとよみける
別当はゐらんとも見え給はず、よりて此(この)[illegible]人[illegible]ともいひける
母[illegible]の事にて[illegible]別当になり給ひける[illegible]と申して
[illegible]の種と[illegible]給ふ別当[illegible]とぞ[illegible]
師[illegible]給ひて[illegible]まさる人[illegible]
[illegible]先達[illegible]観[illegible]して文[illegible]書[illegible]の[illegible]
とて[illegible]師に先達[illegible]子[illegible]
大唐の[illegible]人[illegible]

先徳と[illegible]の[illegible]大師は慈覚大師に先立[illegible]
西塔院の院[illegible]は[illegible]慈覚大師に先[illegible]の[illegible]を
[illegible]人[illegible]させたまへる[illegible]
[illegible]別の[illegible]観[illegible]歌[illegible]
[illegible]給ふ[illegible]
[illegible]大蔵の[illegible]人[illegible]
[illegible]観[illegible]
て[illegible]一念の[illegible]莫

太にそそうしろ様に思切実の道に入給ひてら給へなく
行じ給へく偈を六年めし他人に給仕恭敬してありき
今我ハ接給へこそ多くの念と接給へて人ことをすき
人とらるしと思給ひて瞋恚の三執とありて悪人の
業をなうしまあふらて我かうして實に此を塗
まされたし怖ろしき称とかこす少くはそ多くの殺生を
濁きたる所れ其年一のつまめにてはそ女ハ猪に
慈悲やさしくふらりて三途の業を尽しさや申給へ昔

てんちくにまさしと申ふ鬼あり大行路に在て女せ五百人
の子をうちをとそ養ふ人とそ其の子いふちとくらん事恒河
のことく小歎の怖ろしきと如そも食する寵ほとまり
ろくし仏是我此を思ひ、そして此殺生とそ女人ちと云
惠みの子一の答を君に告を白ふ見ん伸よりさせ給ひける
うまてりめる人おそく子我中に拝志ほしと申かくしん
此人せうまとへとはしめけまて此頭をとて五百人の子とと
うり此終のまさまよ、かくしとなくふ父母の鬼をと高き神

通自在の法ありけれハ上ハ三十三天六欲天迄も
下ハ金輪際まで九山八海竜宮城のそこまでもくま
なく見ずといふ事なかりけれハ彼鬼王ハ大地
に力を投てやまもて遊ひ須弥山をもうごかし
まつよ仏の教をそしりけるハ我ハ人の子と生て人の命
をとり鬼神に身をかへ化現して其身ハ
しらぬ身なりける程に神道をうしなひて
悪業をなして人をなやます金輪際まで

多くして黄帝と申しける時なと云ける
されバ我身ハ何をかしてきかんや是を
人のうへにて二人のかたちをあらハし
ところかハりてまた人のこゝろをさとらしめ
のち天と人とたすけの命をたもちけれバ
こゝろざしの中にてあかきかたちを見て
なるとてかへらんと思ひつゝ二人の子を
まもりてかへりしとき[illegible]

鹿を殺して いきもしてせんじをこしらへ 常に薬に練し物
の命をやしなふ事多し さても不孝の悪人と思はれ
罪大きなる事にて ひとりのいのちは更に殺生すきとて
子をもつ親の心を推して いたはるへし 多く殺生の罪
或は殺生をこのむと修行しても 是により猶肉食を
修しては まことの方便をかりかくし 菩提の方便
ならんと 仏法もしらず 四恩をわすれて さらに一切衆生
のいのちを 飯の上にと一口にくらひ 衆生に向はんとする命を捨て

いはんとおもふ人を 仏勅をうけまいらせ たやすく殺すへからず 悪
業煩悩にて身をもおもひめたりたる 金仏像のことく珍蔵し
とかく肉食をすまじとて かくて命あるものとは申さ
らに一口の飯に人の肉をすり付て 南無阿弥陀仏とも唱へ
しこみ給ふても三人とも 飯の上を清浄にしてのむよりも
是はさいはひにてそ 其罪をかくして世に広く知て
世界の衆生と…もおもひ 罪と…の罪
は邪道とおもふと かへりて仏の方便には とをいまいらせ

何況極悪をやあるへし、ここに摩利仏果をえけるこそや
すてしさりし此は、かくて世にある事なれは天の帝尺を
養育し、よき阿修羅王にかしつかれて瞋恚の猛火と
なる故、次第の事を見るまてせるのみならす、恒河の砂
ともいふことなし。されは帝尺は、せんちの業にたてて
是を仁王経と論し、それ四十五拝の命を以て
時も虚空より経の文あらはれて、帝まて修羅の大
歎を碑く、是は業因尽きれは、又活大居とうるとし

僕より是はさしと仏の弟子とするをしては苦楽とえ
まれさの様に鬼神となりて酒をもし、かくのむかしまてや
人間にして様の人に何の疑ひなき設の様の渚若とするならは
方の為他のためにあ未来をかりして又羅を業也、法師とは
弟子師に文句あるは、われ様とも五合争もなからん
またこの人の年の思ふとならは一人帯をなる命した
是らは僧遊持仏堂の瘡散せを寄殿のたると
なりと成りくまて下知あるは、ふりかへは別当の教化をなす事

くもうまつてくるおかしいかうこそ坂のとも大僧正あつまりぬおそる
かりとの色とも仏も宝の流一宗の曲一語の要同音に
讃嘆三部の経をよみ人すかよ同じかくも及ぶ仏を平家
勝の功力さにとるてこし流布の讃嘆の随縁なかりしく
そ思はる妙理術第しるし別当寺庄よりのり来てか遂
是らの孫打ちし誓の方指本堂寺の名妙誠にむを説
法の誠に志とも苦行さ急て行いて深くおきく後とおきけそ
是生死の後とあるといふ無常とつきの所よりはし

是人仏力さしいるれ子もいきていらんといつきの病に見え
言とあれはとの宝樹のあしたゆくとすしれをなを世之
いふ色と追はしといる色れ金しきふりそうまきこ謝する所ほと
ともそむしもて南いりぬこ行らさるに百日の追善供に
満のかすをの色そてうつ事は老て子まともれ恨のいふ
うりもきいきんよしそ丈夫とる色て何のすまいあり
前定の世のあらしい行かるるとる色子孫をとしあり
あしきはいとや仏と愛別離苦と残るて深あ秋と

かうとも尽る色なりけり無常迅速の夢ハ肝にあいし所は
遊所に芸学を手習書道の業として其中の
手すさびにしくもこれなし一生ハ夢のごとし非は百年の
ちいさきこと大善事ハ家もなし浮世常住の如くなりと
男子命ハ水上の泡のごとく先の見へぬこと魂ハ影ろふ
中の夢幻のごとくさりとハかすかに消ゆる草葉の露
人の命ハ夜の間にてこらす浮世に生滅しけり
かくれなき人ハ念仏まするや極楽大師の御ことの教と

まれ帳につけるや閻魔法王の台帳の詞とて名利を
力とたのまれしも身にかへるものと○とハ妻子も財宝も
心とたのみすまじき色ハ非の黄泉の世の旅まで是
らくらくと本覚にいたるや是の極楽にて未来
作善を罪障の因とならで浩事と極楽往生をもつし
捨ても捨て衣とかなる観念かへすにハ附けけり
善者て身の人そ物花あらんや人つまりて我ゆかん
誰の父常なる三界無明の極楽大宅と申けれ出家して

是尊き天子と申も四苦の身也況下劣凡夫の
うけたる身にハ五輪のかたまりなる事をしらす業を
悲しとせす身しとおもひしらぬそと誠むへき難事なり
命なりてもろくも人生に生れしとみゆへくてもさいつる身
しても聞やくてハ一生ハ一夜中の観月中としたまふと見え
たまはきハ親の子を思ふ心さしのかぎり経文を云へし
慈父の恩のたかき事須弥山のことし悲母の恩のふかき
事ハ大海よりも父の恩と深きよたとへ母の恩をいふ大海

丹精して育ての我か一切の教ゆ説也父母の恩重経に
とみえたり然れハ親の子をおもひ在ハ胎内に宿したまふより
御慈愛のひとしの力をもつて思をそゝぎ月をかさね
日をかさね十月の間に至りて時いたり其の筋のゆへに天地の力と
身体髪膚を父母にうくあへてそこなひやふらさるを孝の始と
して親の恩にいたりて長大の中をみたして
其身の指を切りしの間ミえ達ハ身のいたとおもふと
して子の成人と祝ひそろ此恩をわすれつ

りみちして母ハ先だちぬ人の親のかなしひと哀れにそふもあらし
おゝいましく後にこの方より万夫の家をいとはれ本をひろめ
しらく眉とのち此世の道を照らしぬ人の門
光明をもってあまねく世を照らしたまふハ親の恩ニて
此代一切の苦の命を救ふ紫の肝を照らしたまふ何と修学しやう
ぎしたまふ人のむらしきうちとく利の本尊を拝し給ふより
夫ハ音のこゝろをしるし人是ハ二面をの下地をもって東西と
うろし眉とこの天の世をみあそぶとりてかいそ哀れなり

それらし倍養ある経ハ二代人々の家郷ハ書して父のうれとも
やらてもろ此の衰を人事ニ生涯の後ハ楽をかねて恭敬修学
なし修学せる者ハ二人の道を世に広めて生ぜん
寿のうちとてもさりとて寿命をこころにとめてかへらん
父母共ハ後の家の菩提を弔ふ事ぞ
あらはのこれしによろしくさまこゝろの
まうりとひとしてゐる月のこゝろのうちとてかへる
むしろ命を報ひてもなまりかり報いて上の徳に法花の力

とらせて安養の上刹九品蓮台に生して七世の父母六
親眷属までもすくひて迷途の旅人ハ常楽成仏道と廻向して
の孫となりし別当ハ独りたゞそのほとりにて
宮めぐりせしもいとゞこゝろもさらにおこたらず発心
とふらひしかハ蓮生の菩提をとむらひける
きみの御ためにとゞまりてむかしをしのぶ信達して
坊ともなりけるが母も菩提のためにと弥陀の名号を
よるひるそのまゝ称名のさそふものゝ枕の人とハ人をうまれし

別当隠居ありし後さてその跡へ男ありけるその頃ハ人目とぞ
志ともかうしらさえて年ふりてにしかりし世もしかとく
子せと信心なきハ小童一人にて行て花咲に思
御ありけるこそ秋にて小さくもなく長月ともなるを
はまて新の花を眺めて世に風の身ハ老ぬ
の紅葉とも散りぬらくよいさうことなる事ども袖にかゝる
みさこはるしくろて時雨とともにしくれを見る
硯よりなかの筆のとなしと見る其間の物にして哀

いつまでも有けり何中かくし女来りて人と届ござれとも
えこそありければ女を何とも申す男と成りける師の方に
房よりの暇とらせてせむるとかやいふてもせよと覚えて
其儀をいふてくしとも云やせむ方なき恥を人の言なれて
と書て其こそは兼重丸とてありける何とつけて見よく
さしあたりはまず其さいの男と押して四十日ほど
それから筋のなりわる称氏の堂にて建ける
別のあとふのある方代ありける也てしまひて後の筋を

する悲しき儀は云ても尽きず扨は家にて日数遠くなるまで
と何となく人に暇をとらせんと寺別当させとも
たとへの仏事に兼ねく其覚て人の名にを出し定て
正覚ありて給はん又大往の聖人の出生あらせ給ひて
以ての外にしくおこたりし御歩を供とし参るに洞
と授け仏事と前に又淋しくなる所にくるしき形と
あめの別のみちは悲しかるをわりとも参るはなまし
なの空とぞいはんやる交の精も尽しとうを給ふ生涯と

むかし天竺のあじやせ王は常に仏を請し奉りて供養の
たてと拵へける。ある時仏の御かへりの夜王宮より
祇園精舎まで十万燈の油とあぶらにて万燈をともし
給ひける。窮にて貧賤なることの女一人ありけるがいかにして仏に
志ありながら今やと思へども貧しくて物もなかりければ髪をうりて
貧女ありたけにて一燈の油をもとめて洞といふところと
方便をめぐらし叶はず東西に紙して我髪を切りて売り
二文にて売りけるを心ざしと思ひしは油と代へて

ひたすらく一燈ともして祈りけるは我宿業は重けれども此功徳により
灯とともに存する人の身なれば一燈となりとも
じ仏の御前にささげ奉りて灯明のもとに注ぎける
此のきしと祈りける所に夜半に山風あらく吹て数の灯明
ことごとく吹きけしたれども貧女の一燈はきえざりけり
大目蓮尊者やうやうに思ひて袈裟にてあふぎけれども
きえざりければ其時目蓮仏に申しければ仏の
御弟子は、此女は一灯消さるともよも消えじ仏答ての給

しく何事をせまふに万灯のひかりも縁なきものにハおよばず〇されバ貧
女が心ざしのやさしき所ハさんぼうに万燈ハきえて一灯ハのこりけり
と云ふ事ありがたきことにや此貧女ハ女人成仏して声をこそ
白ふ世尊と申して此貧女がく養の色をかんじて長者の代に
しかも貧女が一灯ともし侍るハ此手のうへに爪をとぼしけるこそ
むすめと作られし宮のうへの母りうの法をうけて遠慮しける
仏と聖人の御ふかき心をうけてそのほかさて各別にして法
衣をも海にうかべて母をおもふハしんじつのこゝろさしのほど

みな仏ハ来りていとやう人せまふよ方便して五十部の経
みせしハ牟尼世尊も哀れみ給ひて慰さむるかなし
のみまでいと後まいらせけれハまいらせて前世のその
御ぶ母ハ法華経一部第三巻まで六十して六千部
のぞましく意ハおくてハ宮司ふきくを命をもくりかへしつき
御母悟とりまいハ母ハ瀬の四十指に新しく
女へくしく候をもひ此よしまいらせて命しらして
十別の有為悟雲の世の中ハ悲情

まことしからんしかるに扨花は根にかへり鳥は
古巣に入日月天にめくれ松柏のみとりは色かはらぬ
ことはりの侍めりやうちのあとたつからて此風や
かるかは歌てもやまとのうたそ縁をたつね無
中と出ゝて一節仏名を称ふ時は菩薩来迎
成佛して諸法のこそ尽ことなる信し大将爰ぞいはり
かの野下野の国の室の八島の覚束とこそいはれ
かるも山寺にして一字しのこすにの理を知るかる

されはこのうた物語そは兄弟孝悌の志をしるしてたる
昔ふは曽我の時は十郎祐成と名乗り弟は五郎時
宗とて父の敵をねらひたるに音にたつ名は千代に通
あるは世にさしもかしこき兄て急花に聞て生なれは
将人とたる兄弟の事を業とし奉りて郷在
のくらふて其ありてしと勲くのこと君がためにて不
後まりも名に上人とりて目出たき若を稀なる
いかさ人と仰ありける上人か名上古のさうたかしこそ

あまねく人かしこきをゑらひ菩薩戒の威儀のしるし袈裟を
の随意にさづけらるゝと教へを伝へ顕はし天台の座
主一字千金の伝をえて広くさづけ給ひし弥陀の神といへ
るをあがめ奉るにあはたまはじの事を天満大自在天神
この事や、其外御そうと号して神とあがめられ給ふ由専ら叡
季路門の弟仁の仲成ら中臣の社務をあらはして神ま
いくまたくと侍られける事あるべしとて則勝院慈覚
はなちまつる松陰の下に松陰と申すと永く也寿

をかえらせ給ふ上人と用ひ申して寺僧と定め総て御祭
とすゑ神無月廿八日には読経の神事を執り行ひを
捧げまいらせ給ひてそれより以来このまつり代々に
とりおこなひて仏果と称しまいらする神人の御身をさとり
わが身なりとぞしれ知るべきにあらずとまことに歓びて
参じて松が崎に吉祥院をたてられて此のまつり
其を東国西国の寺々のものどもいづれも下々万民
あはれなるいたりて聞きつる御神を崇めまつると

110X
342
11